



羅針盤

日野 治子
Haruko Hino



関東中央病院 特別顧問, Visual Dermatology 編集協力者

新生児期の皮膚変化は？

近年、診療中に子どもを診察する機会が減ってきているような気がする。開業の皮膚科の先生方はそんなことはない、たくさん来ていると言われるかもしれないが、病院診療では、子どもたちは小児科にかかる回数が多いためか、そのついでに皮膚病変も皮膚科でなく小児科で診てもらおうことが少なくないようである。今後、予防接種の回数の増加が見込まれると、さらにその傾向が増すかもしれない。かつては日常的に診ていた子どもたちであり、時には出産に立ち会って、産科医、小児科医達とともに新生児を診ることもあった。その子どもたちが、新生児から、乳児、小児、学童、生徒と、徐々に成長していく過程を、本人、家族ともども見ていくのは一種の楽しみであったが、その機会が少なくなったのは少々寂しい気がする。

もっとも基本的な生まれてすぐ、すなわち新生児期には本人はともかく、周囲の私たちが驚くほどさまざまな症状が出現する。母親の胎内で大切に守られてきたのに、一度に外界の荒波に放り出された結果、先天性のみならず後天性と、さまざまな症状が皮膚面に現れる。当然、親・保護者達は、これは何？重症か？と、思い悩む。私たちは、放置してよいか、放置すべきか、積極的な治療をすべきか、するなら何をなど、答える必要がある。ところが、皮膚科医が新生児を見ること、ましてや直接触ってみることは、非常に稀になっているのが現実である。

どのような皮膚変化や病変が生じているのであろうか。それらを知る方法として、実際に経験した皮膚科医に教示していただくのが、もっとも早くかつ正確であろう。そこで、今回、聖母病院皮膚科 川上理子先生にお願い

して、新生児期にみられる皮膚の変化を特集させていただいた。

総説として、新生児の皮膚に現れる症状を、川上先生ご自身の経験をもとに、生理的・症状から病的・症状まで網羅して解説して下さった。あたかも新生児期の皮膚症状のアトラスを見るかのような総説である。また、各論として、新生児期に見られる、皮膚病変で、経過観察のみでよい症状、積極処置に治療すべき症状などに関しては、それらを今までに経験した先生方に、症状、さらに治療にも及んで、解説していただいた。また、実際の現場で、どのようにご両親・ご家族に説明すべきかについても触れているのはありがたいことである。

かつて習慣的に行われていた出産直後の沐浴が「不浄から赤子を清めるための儀式」であって、新生児の体温を下げる、バリアとなる胎脂を洗い流してしまうなどの点で、現在は行わないことが推奨されるなど、産科、小児科では常識になっていることも知らなかったなどの経験を持っておられる先生もいらっしゃるのではないだろうか。自分自身もかつて、ひょっと調べたときにこの事実を知ってびっくりした。

こういうちょっとしたことを含め、新生児期に生じる変化の温故知新はもとより最新の遺伝子検索、現在のトピックでもある出生前診断まで、多くの事実を取り上げたこの1冊で、新生児の皮膚病変に関しては、エキスパートになること間違いなしである。でき得れば、産科医、小児科医、さらには助産師・看護師の方々にも手に取って、見てほしい1冊である。すべての人生は大事な新生児期から始まるのであるから。